

はじめに

本書は、生物系の大学院生以上の方を対象としています。理由は、英語で発表が行われる学会等に出席するのはこのレベルの研究者だからです。

本書には、5人の研究者の学会でのプレゼンテーションが収録されています。そして、対応するトランスクリプト（英文）が載せてあります。ご覧になればわかりますが、使用している英文そのものはそれほど高度ではなく、単純です。文学と異なり、サイエンスは、明瞭さ—Clarity—を基本姿勢としているからです。これに加えて、生物系のサイエンスは、図・表の形でデータが提示されます。サイエンスのトレーニングを積んだ人たちは、同じ分野（あるいは近傍分野）の仕事の場合、発表者の話を聞かなくても（あるいは該当論文を読まなくても）、図・表を見るだけで相当正確に結論を導き出すことが可能です。すなわち、英語といえども恐れる必要はないのです。ただし、新しい概念が提示された場合は、英語力が重要となります。また、第三の言語とも言える専門用語の概念をきっちりと理解していることは必須です。

英語が母国語でないということは、圧倒的に不利であり、大きなハンディキャップです。しかし、TOEICやTOEFLの結果から判断すると、他の非英語圏の国々と比べた場合、日本人の英語力は大分落ちるようです。理由は、英語のトークや文章を理解する際に、日本語が介在しすぎているためだと思われます。英文和訳という手法は、非常にパワフルで便利なテクニックです。しかし、理解するプロセスを考えると、英文を日本語に変換した後、すなわち和訳を読んだ後に理解に達しているということになります。英語を読んだ瞬間に理解しているわけではないのです。したがって、ここでは日本語を理解しているのであって、“英語”を理解しているのではないことがわかります。英語力をつけるには、日本語の仲介を排除することが必須です。これには、会話から入るのがベストだと思います。ある程度会話ができるようになると、自然に日本語の介在を必要としなくなります。この後は、例えば英文の場合は、精読と乱読、リスニングの場合も類似の試みを行います（精読に相当するリスニングは、例えば本書に収録されているプレゼンテーションを聴き、点検・解析していくことが対応しているといえます）。あとは時間をかければかけるほど英語力がつくこととなります。

英語習得の目標をどこに置くかは、人によりますが、専門関係のコミュニケーションのみを目標とするのは惜しい気がします。もう少し頑張れば、さらに大きく進歩するはずですが、“曲がりなりにもバイリンガル”を長期の目標にしてはいかがでしょうか。英語圏の文化は、注目に値します。また、それは英語ができることでより一層楽しめるものなのです。